



会員数 20人

北九州プロバスケットボールクラブ月報

つながり

No. 214

令和6年4月号

2024. 4. 16

3月卓話 「伝統文化大道芸」の歴史と実演

ボランティアグループ 大道芸「びっくりばこ」

世話人 阿波 八郎 氏

最近では珍しい実演の卓話になった。まず自己紹介では9人兄弟の8番目で、みなさんと同じ時代を生きてきた81歳ですという。最初に相撲甚句を紹介、みんなに「ハーどすこい どすこい」と合いの手の入れ方を指導した後、花尽くし甚句では「あまた名花のある中で、本日集まりのご婦人方よ、これぞ若人のよう、ハーうばざくら」とユーモアをまじえた甚句を披露。「うばざくらは桜こまちが年齢を重ねても美しかったという意味です」としっかりフォローした。



続いて持参した法螺貝を披露、「以前、女子大で演奏した時は若い女性に囲まれドキドキして、うまく演奏できなかったが、今日はできると思います」と笑いを誘ったあと、法螺貝を吹いてみせ、会員を代表して大石さんも挑戦、体格にものをいわせ音を出し、拍手を受けた。

巧みな話術で人を集めた「啖呵売(たんかばい)」では映画「男はつらいよ」で有名になった「結構毛だらけ、猫灰だらけ」の口上の全てを語り、それを門司港の人がバナナのたたき売りに活用した歴史がありますと寅さんのような口上で披露した。



今では姿を消した「のぞきからくり」は新潟県内の美術館にただ一つ本



物が残されているという貴重な大道芸で、その歴史や仕組みを紹介しながら「八百屋お七」の物語をリズムよく披露した。阿波さんも「私も行ってみたい場所です」という。最後がバナナのたたき売りで歴史を紹介しながら、みんなの手拍子でたたき売りの口上を語りながら「サーこうた、サーこうた」と16本が束になった大型のバナナを1000円、500円と値下げをして次々と売りさばいた。衣装も芸に合わせて替えながらあっという間の1時間余りだった。ただ、脱線も多く、豊富な雑学の持ち主で、話があちこちに飛び、時間をオーバー、会長謝辞も省かれたのが残念だった。(安高)

3月例会報告

欠席届が4人、参加は16人と少し寂しい例会になった。ストレッチ体操も指導役欠席で中止、でも、お誕生会は5人とにぎやか、それぞれに記念品を受け取り、感想を述べた。会長挨拶では「隣家にウグイスがきていた、春が近づきました」と明るい話題、食事の後の卓話は、ボランティアグループ「びっくりばこ」世話人の阿波八郎氏が伝統芸の相撲甚句やのぞきからくり、最後は北九州市民にはなじみの「バナナのたたき売り」実演を披露、滑らかな口上とともにバナナを次々と売りさばき、会場をにぎやかにした。クラブ25周年記念事業は例会日と同じ11月第3火曜日として「内容は検討中だが、外部から人は呼ばず、会員だけで行い、負担をかけないことにした」と報告があった。ショートスピーチは柴村会員が担当、故郷の自慢や思い出を紹介した。(安高)

例会委員会

4月2日 7名出席

5月の例会卓話は、西南女学院大学の中島俊介教授に「幸せの人間関係～あるがままに生きる」をテーマに講演していただきます。6月はコンサート関係に内定しました。総会の開かれる7月の例会卓話は30分間の会員卓話となっていますが、「同好会自慢」のお話をお願いしようかと準備を進めています。関係の方々、ご協力をよろしくお願いいたします。

卓話はバラエティに富んだ楽しいものにしようと、委員で知恵を出し合っていますが、他の委員会委員の方もどしどし希望を出していただきたく、お願いいたします。(松本)

交流委員会

4月9日 8名出席

湖月堂で17時30分から開催。戸畑菖蒲観賞会について話し合いました。5月30日、日帰り親睦交流会として行くと、古賀会員が作成した資料で説明があり、詳細は4月例会時に皆さんにお知らせします。戸畑菖蒲鑑賞会は今年度最後の交流委員会の行事となります。皆様の参加をお願いします。

続いて誕生日カード作成・担当についての確認を行いました。カードのメッセージは現在2名に依頼していますが、1名でいいのでは？と話し合いましたが、会員全体の意見を聞いたうえで決めるはということになりました。美味しい食事しながら楽しいお話をして散会しました。(吉田秀子)

広報委員会

4月5日 7名出席

絶好の花見日和にも拘らず12時30分からテトラホテル北九州に全員集合です。いつも通り「つながり5月号」の編集会議から。各々の原稿執筆担当者や写真担当者を確認し、同好会活動の活発化を喜びながら、トピックス記事や会員情報等の交換も行いました。続いて「つながり4月号」の校正は、文字が大きくなりそのせいか各委員からの鋭い指摘がつぎつぎに出ました。会則等の見直し意見の集約も今月で終わり、充実した会議となりました。(内藤)



ふるさと自慢

No.77 柴村美和子

私のふるさととは長崎県島原市です。今は両親も亡くなり実家に帰ることも少なくなりましたが、しきりに幼い頃のことが思い出されます。そこで今日は私のふるさと自慢の話をしたいと始めました。

町の中は島原城ですが、この城は私が高校卒業の頃に復元されたものです。城の周りに小・中・高があり、中学校の運動場は二の丸跡でした。お堀は桜並木に囲まれ春には満開の桜の下を歩いて学校へ行っていました。それに、有明海は新鮮な魚が豊富で、フグのことを「ガツパ」と言い、棺おけ(がっぱ)をそばに置いて食べることからきているそうです。4月になると産卵のため有明海に来るフグを、厚くそいで湯引きにして梅酢で食べます。また、フグのあらも甘辛く煮てもらい食べていました。70年前は、秋にワタリガニよく捕れていましたが、今は少なくなっているようです。マテ貝もよく採れて、遠浅の海へ子ども同士で出かけて、バケツいっぱい採って湯がいて食べていました。高校生の頃市内に温泉が湧き、私の家にも引いていましたが、平成3年の普賢岳噴火後は泉質が変わったそうです。現在島原市は観光事業に力を入れて、武家屋敷も整備され、町のあちこちに水が沸き鯉の泳ぐ街となりましたが、子どもの頃とは違って、思い出が遠ざかっていくようでちょっと寂しいと話を結ばれました。

話を聞かれた皆さんも、きっと頭を低れて各々のふるさとを思い出されたのではありませんか!

(内藤)



今月も楽しい同好会でした

歴史文学講座

3月26日、昨年6回シリーズで学んだ火野葦平ゆかりの地・若松を訪ねる文学散歩を楽しんだ。参加したのはゲストを含め6名。午前11時から若松市民会館内にある火野葦平資料館を見学。昼食後、葦平が住んでいた河伯洞を見学した。

河伯洞は、葦平が芥川賞を受賞したのをきっかけに、父親の玉井金五郎が建てたもの。立派な作りで、管理人藤本久子さんの案内で、葦平が「花と龍」を執筆、自ら命を絶った2階の部屋を見学した。その後、葦平の代表作を映画化した中村錦之助主演「花と龍」(前編)を鑑賞した。

なお、4月例会は23日午前10時から松本清張記念館で。史学博士廣崎篤夫先生による5回シリーズ「戦国争乱の北九州」が始まる。会員の皆様の講座への参加、大歓迎です。(松本)

食 美 会

3月14日春めいた日差しのもと8名が参加しました。今回は小倉南区高坊にあるイタリアンレストラン「心」で11時30分からスタートです。1階が花屋さんで、春爛漫の花を眺めた後、2階でのランチでしたので、料理がより美味しく味わえました。珍しい野菜がふんだんの前菜、メイン料理は素敵なものでした。完食して栄養補給が出来て満足満足。おしゃべりも盛り上がり、楽しいひとときでした。次回はどこに行くのでしょうか？

(新城)

歌をうたう会

3月22日15時から、西小倉市民センターで開催。今回は久々に全員出席で5名が揃った。今春は不安定な天候が続いているが、先ずは、全身の血行を良くする手先から体幹、下肢の簡単なストレッチで始まった。前回の練習曲「故郷を離るる歌」を、次いで今月の練習曲「故郷の廃家」のソプラノ、アルトとの音程レッスンを行った。2ヶ月前の「旅愁」、今月の「故郷の廃家」とも時代は大差ないアメリカ民謡であるが、熊本出身で明治、大正、昭和の過酷な生活を経験した犬童球溪の作詞である。両歌とも日本に同化し、「中等教育唱歌集」に採用されている。(古賀)

Ⅰ. 日本酒の会 Ⅰ.

3月27日午後6時から、守恒のNAOで10名が参加。NAOが3月末日で閉店するので、感謝の気持ちを込めて会員一同集まりました。乾杯は茨城の「来福」で純米原酒(桜の花酵母)、飲んだ後に甘味が残る美味。次は石川県の「手取川」と「五凜」を能登の震災からの復興を願いながら飲む。続いて埼玉の「神亀」(神亀酒造)も美味。いつもはこれで終わりですが、イケイケと盛り上がり、もう1杯追加した名古屋の「醸(かも)しん九平次」でオーナー夫妻のこれからの健康と発展を願って乾杯しました。賑やかで充実したひと時、ご夫妻との別れを惜しみながら、楽しい会は終わりました。(新城)

3 月のお誕生日おめでとうございます (敬称略)

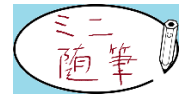
神田澄男(11 日)



安高洋一(31 日)

遠藤信子(12 日) 藤原智子(16 日) 安河内幸子(26 日)

もう一つの「利他の姿」 ～卓話の講師をお引き受けして～



No.85 山下静江

昨年12月例会で「卓話の講師」をお引き受けし、「活かされて生きる 京セラ創業者 稲盛和夫氏に学ぶ利他の心」をテーマにご清聴いただきました。その後に著書、講演資料、京セラ HP などを読み返し、奥様である朝子さんのお支えが彼の「複合的な運の強さ」の大きな要因だったと感じました。その中の一つのエピソードとして、入社3年目の稲盛氏が松風工業を退職し、自力で起業するという事になった際、同僚の須永朝子さんに「どんなことがあっても、自分についてくる人が誰もいなくなっても、私についてきてくれるか」とプロポーズし、彼女は何も聞かず「いいですよ」と答えたそうです。朝子さんの父親は須永長春博士(育種学)ですが、韓国名を禹長春と言われます。事情により朝鮮半島から日本に亡命した禹 範善氏と日本人の母から生まれたため、日韓の狭間で厳しい人生を歩まれ、逆境の中で研究に没頭され、多くの弟子を育て、最後は渡韓され「韓国農業の父」と称されました。朝子さんのお母様は、お父様の生き方に心からの協力を惜しまず、終生彼の人生を支えた方だったそうです。彼女はこうしたお母様の姿を見ながら育ち、それは稲盛氏との生活に自ずと反映されて、稲盛氏に大きな影響を与えたと想像します。稲盛氏はあるインタビューで、朝子さんを「素晴らしい女性」と遠慮がちに話されています。朝子さんはお母様が須永博士を支えたように、稲盛さんに尽くされた「本当に素晴らしい伴侶」だったのでしょう。朝子さんの生き方は、利他の心を持ちながら「夫とともに自分自身の人生を生き抜いた」ことになるような気がします。

ありがとう BOX メッセージ 3 月分 (入会順、敬称略)

★今日も出席出来て感謝!!(遠藤) ★やっと春、でも気温の不安定が気になります。待ち遠しいです(古賀) ★(松本) ★(植田) ★大道芸の“のぞきからくりの絵”なつかしかったです(内藤) ★今年の目標をたてましょう(吉田信雄) ★誕生祝ありがとうございます(安高) ★春ですね動きやすくなります(橋本) ★今日も無事過ごせましてありがとうございます(柴村) ★いつも楽しいひと時をありがとうございます(藤原) ★早く桜が咲いて、花見がしたいですね(新城) ★体調に気を付けて今を楽しみたい(大石)

収支報告	令和6年2月末残高	140,387 円
	令和 6 年3月分	6,000 円
	令和6年3月末残高	146,387 円